

医療維新

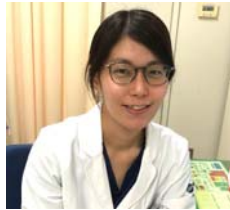
シリーズ 「医学部卒後10-15年目の医師たち」～JCHO編～

医療維新

「妊娠・出産でキャリアを諦めないで」女性外科医の助言

切断指修復の美しい手技に魅せられて -テーマ4「急性期」Vol.2-

オピニオン 2018年11月22日(木)配信 JCHO東京高輪病院 整形外科 増山直子

増山 直子 Naoko Masuyama
JCHO東京高輪病院 整形外科

【略歴】

富山県出身。2004年金沢大学医学部医学科卒業。国立国際医療センターにて初期研修後、東京大学整形外科に入局し、都立広尾病院、都立墨東病院、東京大学医学部付属病院、関東労災病院を経て2015年9月より現職。

【所属学会・取得資格等】

日本整形外科学会専門医 日本手外科学会

私が整形外科を志そうと決めたのは、研修医の時でした。学生時代は、整形外科のイメージはスポーツ好きな男性が選択する科で私とは無縁とと思っていました。しかし研修中、救急で来院する患者さんの多くが外傷患者であり、整形外科がこんなに需要のある科なのかと驚きました。そして救急現場で迅速に対応する先生方の技術の多さに感動しました。整形外科ローテーションを選択し、手術に入らせてもらうと、その手術が「合理的で美しい」と思い、また術後の患者さんが思ったように元気になって退院していくのを見た時にとってもやりがいがあると思いました。そうして研修医の時、自身でも全く予想もしていなかった整形外科を選択しました。

整形外科は四肢、体幹の骨軟部組織全てを扱う幅広い知識を要する科で、整形外科医はおよそ10年で基本的な外傷に関する知識や手技を習得し、その後で専門を決め、さらに研鑽を積むのが一般的な道かと思います。私は整形外科専門医を習得した2012年頃に手の外科を専門にしようと決め、関東労災病院でマイクロサージャリー、再接着の技術を教わり、現在の勤務先であるJCHO東京高輪病院に赴任してからも切断指の要請を積極的に受け入れております。都内には多数の大学附属病院、3次救急病院がありますが、切断指に対応している病院は少ないため、大学病院や都外（あるいは他県）から当院への転送もあります。

切断指は、虚血の許容時間が6時間程度であるために緊急手術が必要です。また、手術は1mm未満の血管をつながなくてはいけないため、顕微鏡下での繊細な作業を求められます。昼間～夕方に搬送されることが多く、手術室に入るのは夜で、その後、手術が5、6時間と続くため、体力と集中力を維持させることも大変ですし、家庭の状況を含め臨機応変に対応しなくてはなりません。また、翌日も通常業務があり、週4、5件の手術と週3回の外来、日中の救急当番、さらに月2、3回の日当直（うち1回は日直で、外傷患者を多く引き受けます）も担っているため、定時帰宅は難しく女性にとってはハードな科なのかもしれません。

現在勤めているJCHO東京高輪病院は、東京都港区にある病床数約250床の地域中核病院です。近隣に多数の大学病院や3次救急病院があるので、重症外傷を診る機会はありませんが、軽度から中等度の外傷患者の受け入れと、さらに2014年からは地域包括ケア病棟を開設し、急性期を脱した患者さんが在宅療養へ戻るための地域に根付いた役割を担っています。整形外科は総勢8人で主に一般外傷、スポーツ外傷、手の外科領域の手術を行っています。

時間度外視で技術・知識を吸収すべき時期に妊娠・出産

私は医師4年目、国立国際医療センターで後期研修中の整形外科医としてスタートしたばかりの時期に、妊娠・出産を経験しました。たくさんのお話を時間度外視で吸収しなくてはいけない時期に思うように働けず、周りの先生方に申し訳ないと思う気持ちと、整形外科医として独り立ちできるのかという不安と、いつも闘っていました。外科医は手術に立ち会うことでしか学べないことが多くあります。時短勤務では同僚と同じように症例や手術を経験していくことが難しいと思い、通常勤務と当直業務を早々に再開しました。時間外勤務に対応できるよう保育園後のベビーシッターをお願いしたり、家事を外部委託したり、区立保育園と院内保育園をはじめてもらったり（送迎はベビーシッター）と、毎日時間調整が大変でした。主人以外で子育てに協力してもらえる身内が近くにはいなかったため、当直や緊急時には主人が子供の世話や家事を



手前が筆者

担って来ていました。主人も内科医で忙しい職場でありましたが、私が当直中に主人に呼び出しがあった場合は、子供を連れて出勤するなどしてくれました。主人も大変であったと思います。

しかし、子供の急な発熱など想定外の事態も多々あり、その度に主人や私の職場に迷惑をかけました。仕事を続けてこられたのは周囲の方々のおかげです。特に上司の配慮には気持ち的にも救われました。どうしても帰らなくてはいけない時、「お母さんは大変だからね」と、私が仕事で開けた穴を臨機応変に埋めてくださいました。また診療、手術、学会発表、論文作成と多岐に渡り、技術や知識を惜しみなく教えてくださった上司には感謝しかありません。とても恵まれた環境であったと思います。

大変ではありましたが、“伸び盛り”の時期を乗り越えられたおかげで、医師としてできることは多くなりました。マイクロサージャリーは「手の外科医」として強みであり、切断指を救うのは使命であると思っています。切断指の治療は本当に患者さんに喜ばれます。笑顔で患者さんが“卒業”していくのを見られるのは医者冥利に尽きます。子供が小さい頃はがむしゃらにやってきましたが、少し余裕ができた今、キャリアを諦めなくて良かったと本当に思います。

医療現場は男女問わず過酷です。医師の勤務時間総数のうち、定時勤務（1日8時間×5日）が占める割合は3～4割程度と言われ、2割程度の場合もあるようです。病院は24時間365日オープンですから、平日勤務以外の業務を担うことがどれだけ大変かを想像させます。整形外科は特に救急の患者が多いので負担が大きく、そのため育児、介護等の個々人の問題をカバーする配慮を周囲に求めても、いつでもかなうものではないかもしれません。しかし医療現場での働き方の歪みを見直す必要はあり、JCHOの尾身茂理事長が動いてくださっているように、全体のTOPが女性支援を働きかけてくれているのはとてもありがたく、キャリアを積んだ女性医師が増えることで男性医師主体の長時間労働の是正にもつながり、男女ともに働きやすい環境になっていくのではないかと期待しています。

また、働きやすさはトップダウンの制度化だけでなく、一緒に働く仲間の理解が大切だと思います。最近では男性が積極的に子育てに参加することが自然になりつつあるように感じますので、そんな時代の流れで今後は女性ももっと働きやすくなるのではないかと思います。子育ての大変さを理解する上司も必ず増えていくはずで、女性医師の先生方には、妊娠出産でキャリアを諦めないでほしいと切に願います。妊娠出産を経た女性医師が活躍できる環境づくりに、私もできることから協力していきたいと思っています。また、同じ志を持つ後輩に微力ながら技術を伝えていけたらと思っています。

シリーズ [「医学部卒業後10-15年目の医師たち」～JCHO編～](#) »